

# 比較文学の草分け本間久雄の足跡を訪ねて

Honma Hisao, An early Researcher in Comparative Literature

五島 正夫

Masao Goto

## 序

夏、筆者はある本間久雄（1886 - 1981）に関する書評<sup>1</sup>を書いたことがきっかけになり、まだ一度も行ったことがない本間の故郷米沢に向かった。学生時代、本間の文学概論の講義では、ギリシア文学の英文学への影響、日本文化・文学（例えば浮世絵）の英文学への影響等々、比較文学的立場からの言及は、文学というものの醍醐味を満喫させてくれるような気がした。批評に関しては、マシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-1888）、ウォルター・ペイター（Walter Pater, 1839-94）等を熱心に紹介すると共に、本居宣長（1730-1801）の『宇比山踏』（1798年）、『玉勝間』（1812年）、『源氏物語玉の小櫛』（1796年）などを論じられた。外国文学者でありながらも、常に日本文学をも見失わない態度が新鮮に感じられた。特に本間の英国に於けるオスカー・ワイルド資料入手の経緯は、文献を収集する上での良き指針となるべきものであった。また、作家研究に雑誌がいかにか貴重なものであるか、ということも講義を通じて教えられたように思う。英文学特講でのウォルター・ペイターの『ルネッサンス』（*Studies in the History of the Renaissance*, 1873）の一節は、文学研究の第一歩を踏み出させた指針となったと思っている。この小論は本間の生まれ育った米沢という土地がいかにか本間に影響を与えたかということと、研究業績（比較文学・異文化研究）の足跡を辿り、本間の目指したものを確認するという試みである。

## 越後番匠町

本間久雄は米沢の越後番匠町<sup>えちごばんじょうまち</sup>で明治19年10月11日に生まれた。まず、越後番匠町を特定すべく米沢市立米沢図書館に連絡をとった。古い資料や古地図は郷土資料科が担当していた。郷土資料科の伊東氏がE-メールで対応してくれ、必要な古地図や資料を伝えると共に閲覧希望日までに関連する資料を選んでくれることになった。米沢を訪ねる前にインターネット検索等で次のことがわかった。越後番匠町は米沢城の北側にある侍町を示すこと。町名は越後から上杉家に従って米沢に移った番匠（大工）が多く住んだことに由来している。彼らは侍の身分であり、元々米沢にいた大工が住む地番匠町<sup>ちばんじょうまち</sup>が町人の町であることと異なっている。昭和29年、越後番匠町は地番匠町（大工）、番正町と間違いやすい等の理由から縁起の良い漢字を当てて幸町と改名し、幸町上<sup>さいわいちょうかみ</sup>となった。さらに昭和41年（1966年）に改名して現在中央2丁目となっている<sup>2</sup>。

東北道を北に進み福島飯坂インターを下りて、国道13号線で米沢に向かった。予約の時間に余裕があったので、上杉家菩提寺の林泉寺と歴代藩主の墓所である上杉家御廟を訪ねることにした。郷土資料科で本間の生地は中央2丁目43番地から48番地にあたるのが、市立米沢図書館の郷土資料科の二つの資料を合わせることで確認できた。一つは『ゼンリン住宅地図 米沢市』<sup>3</sup>であり、もう一つは越後番匠町の『写真史』<sup>4</sup>中の明治21年12月に書き写

したもの写真から確認できた。この『写真史（越後番匠町）』の編者豊嶋令雄氏は本間の従兄弟（妹みちと豊嶋三臈の子）であり、本間家の跡地の購入しそこに<sup>5</sup>住んでいることも前出の『ゼンリン住宅地図』からわかった。その写真の地面図中の屋敷には本間の祖父本間益美の名前が載っていた。本間家は代々上杉家の能役者で藝者組に属していた。この祖父は本間を跡継ぎの能役者にしたかったらしく上杉家の菩提寺で催された能舞台に2・3度子役として出した<sup>6</sup>。郷土資料科で本間家の資料は嘉永6年位まで遡れて原典も確認できた。さらに資料はあったが、この小論では、本間家が深く上杉家（米澤藩）と深く結びついていたことと本間が能楽、謡曲等の文芸の血を引く家系であることが確認できれば十分である。郷土資料科では藩校興譲館に伝来した貴重な書籍類や旧藩主上杉家から寄付された古文書等が閲覧できる。

本間の生家を中心に当時の面影を求めて当時の地面図のコピーを案内に散策すると、現在の道がほぼ地面図のコピー同じなのには驚かされた。街を歩き、周りの山々を眺め福島から車でここまで来たことを考え合わせると、米沢は明治32年鉄道が引かれるまでは陸の物流は困難を極めたことが想像された。本間を育てた米沢の文化は陸運で移入されたものもあるが、現地に行って初めて当時の水運の存在の大きさを考えさせられた。時間が限られていたが、観光パンフレットの「最上川の源流」という文面に惹かれて山形県と福島県の県境にある西吾妻山（標高2,035m）麓の大平温泉の近くまで車幅ぎりぎりの山道を辿った。次の日は、米沢から酒田まで最上川沿いにというのは相応しくない表現だがとにかく下った。酒田港に隣接する山居倉庫と庄内米歴史資料館を見学して改めて最上川水運の偉大さを認識すると共に米沢と酒田との結びつきを確認した。明治中期まで陸の孤島とも思われる米沢は、最上川を用いて京都、大阪等関西圏からの物資、文化等の流れは豊富であったように思われた。酒田では著者の先輩<sup>7</sup>が案内を買って出てくれた。先の山居倉庫と庄内米歴史資料館に加え本間美術館、土門拳記念館、

アカデミー賞を受賞した『おくりびと』のロケ地等も案内してくれた。土門拳に関しては次章で述べようとしている、本間に見られる「反骨精神」を共有していることを感じた。

## 悲哀の美学

なぜ本間久雄と上杉家（米澤藩）との結び付にこだわったかという、幕末から明治維新を経た米沢の歴史が本間に大きな影響を与えているからである。とりわけ明治政府の山形県（米澤藩）に対する仕打ちに対して本間の反骨精神が働き、その生き方、研究の方向性を決定付けたと考えられる。このことを平田耀子氏は本間とオスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）との関連で次のように述べている。

オスカー・ワイルドの育った環境は奇妙にも本間のそれと一脈通じるところがあった。本間もまた米沢という周辺地域の出身であり、東北訛りは終生ぬけなかった。漠然と文学の道で身を立てるために早稲田大学に入学した。文章は得意であったが、政財界に知り合いもなかった。当時の地方出身者として、東京で成功することは「故郷に錦を飾る」ことであつたし、東京から地方へ居を移すことは「都落ち」であつた。丁度イギリスに対するアイルランドのように、米沢もまた江戸時代、幕府の圧政に耐えた歴史を持っていた。幕末明治の動乱期、東北の一隅にあり会津藩に接していたこの地は幕府側につき、戊辰戦争で敗戦した。この地は新明治政府においてもいわば日の当たらない、開発の遅れた、発展からとり残された地となつたのである。戦国時代以来、独特の文化はあつたが、国政の表舞台に立つことなく、政治経済の中心からほど遠く、富と権力のかたすみに置かれ、発展からいわば置き忘れられたような土地であつた。米沢気質を表す言葉でソソピンという言葉がある。「偏屈もの」とでもいうのであろうか。だが、損しても貧しても一念を貫く強さでもあつた。

体制に対する無言の反抗、時流に乗らずあえて末流にとどまるプライド。マイナーな者に同情し、弱者、迫害されるものに味方する。ここには、社会の主流を占める文化に対する、その価値観に対する鋭い批判精神があると同時に、矛盾するようであるが、主流に乗らないということに附随する貧困からの脱却や中央での成功や名声に対する強い願望があった。このような感情は、ある程度徳川幕府の圧政のもとで苦しみ、明治政権に変わった時勝者の側につきそくなった地方人が共有するものであった。<sup>8</sup>

本間のライフワークといっても良いオスカー・ワイルド研究が、ふるさと米沢と強固に結びついていたことの認識を新たにした。学生ながらに、本間の学問における「ある種の権力にたいする反骨精神」みたいなものを感じていた。しかし、あえて訊ねることはできなかった。

## 二人の師

本間久雄は坪内逍遙（1859 - 1935）に憧れて早稲田大学に入学し、もう一人の師島村抱月（1871 - 1918）に出会う。坪内逍遙は明治18年に『小説神髓』（1885年）を発表し、勧善懲悪が基本だった当時の日本に西洋の近代小説観を広めた。同年その実践として位置付ける『一読三歎 当世書生気質』（1885年）をあらわしたが、自らの創作理論の徹底とはいかなかった。明治24年に『早稲田文學』（1891年）を創刊する。主観（理想）を直接的にあらわさずに客観的な描写に終始すべきという創作観を森鷗外に反駁され論争に発展、没理想論争として展開された。昭和3年までに『沙翁（シェイクスピア）全集』全40巻を完訳する。日本に西洋演劇を紹介した第一人者でもある。

島村抱月は、東京専門学校（現在の早稲田大学）で文学を坪内逍遙に、哲学を大西祝（1864-1900）に学んだ。卒業後は、イギリス、ドイツに留学、帰国して早稲田大学の講師となり、美学、文芸史の講義を担当した。また、雑誌『早稲田文學』を復刊さ

せ、自然主義文学の推進に力を注いだ。逍遙との関係から、新劇運動にかかわるようになり、日本でのヨーロッパ近代劇の普及に努めるため、女優松井須磨子と共に芸術座を設立し、須磨子による「カチューシャの歌」（トルストイの舞台『復活』劇中歌・中山晋平作曲）のヒットにより、全国各地を巡業した。1918年（大正7年）死去する。抱月の後を追った須磨子の死に伴い、主軸の兩人を失った芸術座は解散を余儀なくされた。

本間は逍遙・抱月の二人の師に恵まれ『早稲田文學』から海外の文学事情をも知りえた。本間が早稲田大学で教えを受けたのは主として島村抱月であった。本間が入学した年は、抱月がヨーロッパ留学から帰国した年であった。本間のライフワークとなったオスカー・ワイルドは抱月から紹介されたといっても良い。本間は卒業と同時に『早稲田文學』の「海外通信」を担当し、海外文学の翻訳や外国文芸の紹介に携わった。抱月亡き後『早稲田文學』の編集を担当したのは本間であった。本間が逍遙の知遇を得たのは、坪内逍遙の養子である坪内士行（1887-1986）との交友関係を通じてともいわれている。本間がワイルドの『獄中記』を訳出した折に<sup>9</sup>、その定本となる洋書をアメリカより送ったのが終生の友人坪内士行であった<sup>10</sup>。ハーバード大学留学中の士行の様子は『越しかた九十年』<sup>11</sup>に詳しい。士行はアメリカ・イギリスに留学後、宝塚少女歌劇団、宝塚国民座、東宝劇団の育成につくした。その坪内士行は本学（神奈川歯科大学）で教鞭を執られていた<sup>12</sup>その人である。士行は晩年本学に教えに来るのを楽しみにしていて、講義のときには品川駅まで娘で女優である坪内ミキ子氏に送ってもらっていたことを聞いている。

## 異文化移入

本間久雄は当時としてはヨーロッパの最新の思想（異文化）を幾つか日本に紹介した。ウォルター・ペイター（Walter Pater, 1839-1894）は、イギリス・ヴィクトリア朝時代の文人（文学者・評論家・批評家・随筆家・小説家）であった。主な著作に『ルネサン

ス』(*Studies in the History of the Renaissance*, 1873)、『享楽主義者マリウス：その感覚と観念』(*Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas*, 1885)、『想像の肖像』(*Imaginary Portraits*, 1887)、『鑑賞批評集：「文体論」付』(*Appreciations: With an Essay on "Style"*, 1889)、『プラトンとプラトニズム』(*Plato and Platonism: A Series of Lectures*, 1893) などがある。教え子でもあったオスカー・ワイルドは『ルネサンス』を「黄金の書」として祭り上げたので、世紀末を通してこの書には「唯美主義」や「デカダンス」のイメージがあった。本間が解釈してくれた文を「序」、「ジョルジョーネ派」と「結語」から引用する。

“To see the object as in itself it really is,”<sup>13</sup>

対象をあるがままに見る。「序」

“All art constantly aspires towards the condition of music.”<sup>14</sup>

あらゆる芸術は絶えず音楽の状態に憧れる。「ジョルジョーネ派」

“To burn always with this hard, gem-like flame, to maintain this ecstasy, is success in life.”<sup>15</sup>

このように硬い、宝石のような焰で絶えず燃えていること、この恍惚状態を保つこと、これこそが人生における成功なのだ。「結語」

Not the fruit of experience, but experience itself, is the end.<sup>16</sup>

経験の結果ではなく、経験そのものが目的である。「結語」

上記のような引用文は唯美主義はもとより、芸術を鑑賞する上でいかに大切な心構えなのかを本間に教えられた。

スウェーデンの思想家、エレン・ケイ (Ellen Key, 1849-1926) の『恋愛と結婚』(*Love and Marriage*, 1903) を日本へ紹介したのは本間久雄で

あった。ケイは進化論の考えに立って人類の無限の発展を信じ、ことに恋愛の意義を高唱して因習的なキリスト教の結婚観を批判し、新しい自由な性道徳を説いた。本間は『恋愛と結婚』を日本に紹介し、女性の地位向上に関わった。本間の「エレン・ケイ女史の恋愛道徳論」(1912)の論文<sup>17</sup>から100年経った今でも、この問題は現在の問題として捉えることができる。

「生活の芸術化」の思想を説いたウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) に感銘を受け本間は翻訳や紹介に励んだ。モリスはロンドン出身。詩人、著述家、工芸家、デザイナー等様々な顔を持っている。オックスフォードに学び、そこで生涯の友バーンジョーンズ (Burne-Jones, 1833-98) と出会う。1856年にダンテ・ゲイブリエル・ロッセティ (D. G. Rossetti, 1828-82) と出会い、ラファエル前派に参加するようになる。本間にはモリスの『変化の兆し』(*Signs of Change*, 1888) を訳した『吾等如何に生くべきか』<sup>18</sup> や『生活の芸術化 (モリス傳)』<sup>19</sup> の著書がある。本間は「生活の芸術化」をタイトルに、大量生産でない芸術品を生活の中に取り入れて行こうという運動を提唱した。本間はそのモリスの「生活の芸術化」を実践していた。事実、本間自身モリスに啓発され、

「有用であることも知らず、又、美しいとも信じないものは、何物も家に置くべからず」ということをモットーとして家庭の中でも美的生活を心がけ、住宅に不要なもの、美しくないものを置くことは極力避けた。客間の床の間には常に気に入りの絵が飾られ、反故紙を入れるくずかごにいたるまで、職人の手で丁寧につくられた民芸品が選ばれた<sup>20</sup>。

昭和初期にウィリアム・モリスの思想はなかなか受け入れられず、いわゆる高度成長期以降に認識され、現在受容されているのはその思想でなく装飾美術作品である。

## ワイルド研究

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854- 1900) は、詩人・小説家・劇作家・批評家と多彩な才能を示した。オスカー・ワイルドはアイルランドのダブリン生まれる。トリニティー・カレッジを経てオックスフォードに入学する。卒業後「芸術のための芸術」(Art for art's sake) を旗印にしてイギリス文壇にデビューし、ひまわりの花を胸に飾ってロンドンの街を闊歩したのは有名である。一般に知られている著作には、詩集『ラヴェンナ』(Ravenna, 1878)、小説『ドリアン・グレイの肖像』(The Picture of Dorian Gray, 1890)、戯曲『サロメ』(Salomé, 1893)、童話集『幸福の王子』(The Happy Prince and Other Tales, 1888) や『ざくろの家』(A House of Pomgranates, 1891)、対話形式の評論『架空の頹廢』(The Decay of Lying, 1889)、没後出版された書簡集『獄中記』(De Profundis, 1905, 完本 1949 年、さらに完全な text が 1962 年に『書簡』<sup>21</sup> 中で発表された) などがある。

本間久雄は島村抱月からワイルドを知り、興味を持った。最初に知ったのは『サロメ』や『ドリアン・グレイの肖像』であると思われるが、『獄中記』を読んでワイルドに深く共感し訳出したことは前述した。それも出版から 6 年遅れであるが当時の交通事情からすればリアルタイムといえる。『獄中記』は同性愛の罪で懲役二年の判決を受けたワイルドが、牢獄からその相手であるアルフレッド・ダグラス (Lord Alfred Bruce Douglas, 1870-1945) に宛てた書簡集である。『架空の頹廢』等で本間はワイルドの芸術論を展開していったが、『獄中記』に出会いその中にワイルドの真髓を見付けた。

ワイルドは『獄中記』の中で人生の転換を、

……the two great turning points of my life were when my father sent me to Oxford, and when society sent me to prison.”<sup>22</sup>

……私の人生の二つの大きな転換は父が私をオックスフォードに入れた時と世間が私を牢獄に入れた時だ。

と述べている。本間は『獄中記』の悲哀を通してワイルドの芸術観が人生観上のものへと発展したことを指摘している。いまだに本間のワイルド研究が輝かしい光を放っているのは、いち早く『獄中記』にワイルドの精華を認めたからである。その中には名声、名誉、財産、家族すべてを失ったワイルドの喘ぎが独特の诗情豊かな言葉で綴られている。本間がワイルドを初めて論じ始めたのは明治 42 年 (1909 年) 3 月の「人生も自然も芸術の模倣也」<sup>23</sup> であり、2 年後には「オスカア・ワイルド論」<sup>24</sup> が発表された。ワイルドに関する多くの論文、翻訳が出され、その成果は『英國近世唯美主義の研究』<sup>25</sup> (1934 年) として実った。ワイルドに関する部分は後半にある。この『英國近世唯美主義の研究』は博士論文として早稲田大学に提出され、博士号を得た<sup>26</sup>。本間は 1928 年英国唯美主義研究のための資料収集を目的とした留学をした。その記録が『滞欧印象記』<sup>27</sup> (1929 年) として出版された。これは「ヨーロッパ文化移入」・「研究資料収集」の実体験をさせてくれる本である。この『滞欧印象記』は本間の博士論文『英國近世唯美主義の研究』と並び称されるべき本である。『英國近世唯美主義の研究』は出版から 80 年近く経っているが未だに内容は色あせていない。

## 結語

本間久雄は『英國近世唯美主義の研究』の出版を機に研究対象をヨーロッパの文学・文化から明治文学に移している。その理由の一つに昭和 10 年代のある日、特高の訪問を受けたこと<sup>28</sup> や戦争の影響で資料等が入手できない事情もあった。それだけ当時の本間の研究対象であるヨーロッパ思想の移入はリアルタイムであったといえる。常に新鮮な文化(文学・思想)を求めてアンテナを張り巡らせていた心意気は、米沢が培った悲哀を含んだ美学であり反骨精神なのではないか。

(本学教授)

## (Endnotes)

- 1 平田耀子著『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』早稲田大学出版部、2012年。
- 2 米沢市旧町名由来表示板より
- 3 『ゼンリン住宅地図 米沢市 2003年5版』、37頁。
- 4 豊嶋令雄編集『写真史（越後番匠町）』、「越後番匠町地面図」、よねざわ印刷、1996年、2頁。
- 5 平田耀子著『本間久雄日記』、松柏社2005年、58頁。
- 6 *Ibid.*, 58頁。
- 7 アカデミー賞を受賞した映画『おくりびと』中の火葬場の場面で僧侶役
- 8 平田耀子著『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』152頁。
- 9 オスカア・ワイルド作 本間久雄譯「獄中記（ド・プロファンデス）」『早稲田文學』第71号、1911年、248頁。
- 10 『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』18頁。
- 11 坪内士行著『越しかた九十年』、青蛙房、1977年。
- 12 神奈川県歯科大学で文学教授として1968年12月1日から1978年3月31日まで勤める。
- 13 Walter Horatio Pater, *Studies in the History of the Renaissance*, (London: Macmillan, 1911), p. x.
- 14 *Ibid.*, p.140.
- 15 *Ibid.*, p.250.
- 16 *Ibid.*, p.249.
- 17 本間久雄著『エレン・ケイ女史の戀愛道德論』『早稲田講演』第2年第7号、1912年、73頁。
- 18 本間久雄訳『吾等如何に生くべきか』、東京堂、1925年。
- 19 本間久雄著『生活の藝術化（モリス傳）』東京堂、1925年。
- 20 『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』227-228頁。
- 21 Rupert Hart-Davis (ed.), *The Letter of Oscar Wilde* (London: Rupert Hart-Davis, 1962)
- 22 J. B. Foreman (ed.), *The Complete Works of Oscar Wilde* (London & Glasgow: Collins, 1977), p.915.
- 23 本間久雄著「人生も自然も藝術の模倣也」『文章世界』第5巻第4号、1909年、63 - 69頁。
- 24 「オスカア・ワイルド論」『早稲田文学』第64号、1911年、
- 25 本間久雄著『英國近世唯美主義の研究』、東京堂、1934年。
- 26 学位授与は1937年4月7日、(『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』34頁)
- 27 本間久雄著『滞欧印象記』、東京堂、1929年。
- 28 『本間久雄－大正時代のヨーロッパ文化移入－』286頁。